

故郷のお祭り

「クリクリ〜？」

「苦しみます、なのです？」

「違うわよ、クリスマスだって言う冬のお祭りがあつたの」

滞在する公都の館の庭から仲間達の賑やかな声が聞こえてきた。声を頼りに中庭を歩くと、東屋の一つに行き着く。

「どんなお祭りだったの？」

涼やかな声の主は黒髪黒目のルルだろう。

年が離れているので恋愛対象外だが、元の世界なら美少女コンテストを総なめにできそうな美貌を持つ。

「一言では難しいわね。白髭のサンタが世界中の子供達にプレゼントを配るお祭りよ」

そう答えたのはルルの妹で、日本から転生した元王女のアリサだ。

植え込みの陰から覗くゆるふわの紫髪はアリサのモノだろう。

「それは気前の良い方ですね」

感心したように呟くのは橙鱗族のリザだ。

橙色の鱗に包まれた尻尾が興味深そうに揺れるのが見えた。

「サトウー！」

東屋の向こうから、ミーアがツインテールにした青緑色の髪を揺らしてトタトタと駆けてくる。いち早くオレに気付いたのはエルフのミーアだ。相変わらずどうやって見つけているのかは教えてくれない。

「おかえり」

「ただいま」

小さなミーアが抱きついてきた。

彼女が頬を擦りつけると、エルフの特徴である尖った耳がオレの頬を擦る。

「ご主人様、おかり〜？」

「おかえりなさい、なのです！」

そう言つてオレの両足に抱きついてきたのは、白髪に猫耳猫尻尾の幼女タマと茶髪をボブカットにした犬耳犬尻尾のポチの二人だ。

他の子達も口々にオレの帰りを歓迎してくれる。

「ご主人様、青紅茶でいいですか？」

「ああ、ありがとう、ルル」

メイド姿のルルがオレに美味しいお茶を淹れてくれる。

今日は館付きのメイド達がいないので、ルルがメイド代わりをしてくれるようだ。

「マスター、今日のお茶菓子はレモンクッキーだと告げます」

「ありがとう、ナナ。美味しそうだね」

そう言つて金髪巨乳の美女がクッキーの載った皿を差し出してくれた。奇矯なしゃべり方に無表情の彼女は、見た目と違ってゼロ歳のホムンクルスだ。

「えっと、どこまで言つたつけ？」

「リザさんが豊漁祭りのお話をして、アリサがクリスマス話だから、次はナナさんか私かしら？」
アリサが尋ねると、ルルがそう答えた後、オレに「故郷のお祭りの話をしていただきます」と話題について教えてくれた。

「自分の経験には無いと報告します」

「あら、そうなの？」

ナナの答えに、アリサが残念そうに合いの手を打つ。

「前マスターの故郷の祭りの話なら聞いた事があると告げます」

「へー、どんなの？」

アリサが皆を代表して先を促す。

「年末に晴海埠頭で開かれる——」

「——判つた！ 昔のコミパね！」

あれは祭り、なのか？

確かに一大イベントだとは思うけどさ。

「違うと否定します。新年の大観艦式というお祭りがあつたと語ります」
大観艦式って言ったたら、海自のイベントかな？

ナナの前マスターと言ったら「不死の王」ゼンの事のはず。

彼は戦中の生まれのような発言をしていたから、日本海軍の頃の話かもね。

「振る舞い酒や鯛メシのオニギリが振る舞われたと——」

そこで言葉を切ったナナがグルンツとオレの方を振り向いた。

「マスターは鯛メシのオニギリを食べた事がありますか、と問います」

「ああ、あるよ」

だから、ホラーっぽい動きは止めて欲しい。

「おいし〜？」

「ああ、随分前だから余り覚えてないけど、結構美味しかったよ」

オレがそう答えると、タマとポチが食べたそうな顔でオレを見上げる。

わくわく顔のルルやアリスは言うまでもなく、澄まし顔のリザや無表情のナナも食べたそうな雰
囲気を感じる。

「ルル、公都の港市場に真鯛は出てたっけ？」

「マダイ、ですか？ お魚さんですよね？ すみません、私は聞いた事がありません」

料理好きのルルに聞いてみたが、公都には真鯛は出回っていないようだ。

「材料が無いんじゃないかね」

「マスター」

ナナが無表情のまましょんぼりとした。

「海の魚が手には入ったら作ってあげるよ」

知り合いの食いしん坊貴族の二人に話したら、取り寄せてくれるかもしれない。今度、夕食会に呼ばれた時にでも相談してみよう。

「ミーアの故郷は？」

「いっぱい」

どうやら、ミーアの故郷の祭りは色々あるようだ。

「一番好きなのは？」

「むう」

アリスの問いにミーアが頭を悩ませる。

小さな手を顎に当てて、真剣に眉を顰める幼い姿が笑みを誘う。

「奉納祭」

やがて、ミーアがぼつりと漏らした。

「どんなの？」

「カグラ舞」

「へー、神楽舞か。やっぱ、エルフの神様に奉納するための舞？」

「そうなの！ とつても素敵なの、とつてもよ！ ルーア達巫女だけじゃなくて、アーゼも舞うの。クルクルなの！ きつと神様も満足なの、たまに祝福の言葉も返ってくるの。本当よ？」

故郷の祭りを思い出して、ミーアが珍しく興奮して長文で捲し立てた。きつと素敵な舞なのだろう。

ミーアを送り届けた頃にやるお祭りなら、是非とも見物したい。秘祭のたぐいじゃなかったらいいんだけどね。

「それじゃ、次はルルね」

「収穫祭や新年のお祝いかしら？ それとも、狼祭の方がいい？」

「狼祭って、どんなのだったけ？」

「下町のお祭りだから、アリサは知らないわよ」

「クボオーク王国じゃ、お城から出た事無かったからね」

アリサとルルは姉妹だが、ルルは妾腹なので下町で育ったそうだ。

「——そんな感じで、狼に扮した大人がイタズラな子達を『悪い子は食べちゃうぞ』って言って怖がらせるお祭りなの」

「なんだか、ナマハゲみたいね」

ルルの説明を聞いたアリサが一言で纏める。

「ナマハゲく？」

「美味しそうな名前なのです」

タマとポチの言葉に、アリサが悪巧みを思いついた子供のような笑みを浮かべた。

「ナマハゲって言うのはね——」

アリサが臨場感たつぷりにナマハゲについて語る。

時々嘘というか誇張というか、世界の違いを考慮したアレンジをしているようだ。

タマとポチだけじゃなく、ミーアやナナまで正座してアリサの言葉に耳を傾けている。

そして——。

「悪い子はいねかああああ」

満を持してアリサが、大声で子供達を脅かす。

「悪い子いない〜」

「ポチは悪い子じゃないのです！」

タマとポチが涙目でアリサの前から逃げ出してオレに抱きつく。

「サ、サトウ」

足が痺れて立ち上がれないミーアが、這うようにしてこちらに手を伸ばす。

タマとポチを両手に抱えているので、術理魔法の「理力の手」を伸ばしてミーアを抱き寄せてやる。

「マ、マスター、私は良い子ですか、と問います」

珍しく、ナナが怯えた口調でオレに問い掛ける。

ちよつとだけ、「悪い子だよ」とからかってみたいと思う稚気が顔を覗かせたが、大人としてそこは自重した。

「タママも良い子〜？」

「ボ、ボチも良い子なのですよ？」

「良い子」

子供達も抱きついたまま、上目遣いで確認してきた。

涙目の上に震える声だ。

「みんな良い子だよ」

オレがそう保証してやると、ようやく安心したように脱力した笑顔を見せた。

「アリサ、脅かしすぎだ」

「ごめんなさい。まさか、ここまで真に受けるとは思わなかったんだもん」

アリサが素直に皆に謝る。

「そうだ。ご主人様の一番好きなお祭りって何？」

「やっぱり、クリスマスや正月かな？」

「普通ね〜」

オレの答えにアリサががっかりする。

「マイナーなので良ければ、正月に祖父さん家に集まった時に行く祭りかな？」

「どんなの？」

「ミーアと同じようなのだよ。幼馴染みの家が神社でさ、そこで元旦の夜明けに神楽舞をする儀式があるんだけど、それが凄く好きだったんだ。子供の頃は必ず見に行っていたよ」

眠目を擦りながら、神楽舞を見ていた。

いつも子供みたいな幼馴染みが、本当に神様を降ろしたように神秘的な雰囲気になるのが不思議で、いつも食い入るように見ていた覚えがある。

「まさか、初恋の彼女とかじゃないわよね！」

「むう、浮気」

アリサとミーアの鉄壁。ペアがオレに迫る。

「違うよ。幼馴染みは年下だったから、恋人じゃない」

なぜか、昔から年下に好かれるわりに、恋愛感情を持てなかったんだよね。

「なら、いいわ」

「ん、許す」

鉄壁。ペアが偉そうに腕を組んで頷く。

別に許して貰うような事は何もないのだが……。

さて、それはさておき――。

「皆、暇ならオモチャ作りを手伝ってくれないか？」

「オモチャ？」

「ああ、今度セーラと一緒に養護院に慰問に行くからさ。積み木やリバーシでも作ってお土産に持って行ってあげようと思ってるんだ」

この辺りなら木工スキルがなくても簡単に作れるしね。

「絵本は？」

「絵本もいいね。タマ、絵を描いてくれるかい？」

最近判明したのだが、タマは絵が上手い。

「それなら、ポチはお話を考えるのです」

「編集」

ポチのお話は面白いけど、冗長だったり支離滅裂な展開になったりするから、ミーアの編集能力に期待しよう。

「マスター、リバーシの線引きと磨きは任せて欲しいと告げます」

ナナがピンポイントに興味に走った宣言をする。

なぜか、几帳面に機械的な線を引くのが楽しいらしい。

「ならば、私は積み木用の木材を切る作業をしましょう」

「私はリバーシのコマを作ります」

リザとルルがそう言って作業用の道具を借りに館の方に向かった。

「それじゃ、私はサトウーサンタ用の衣装でも作るわ。赤い布とヒゲ用に白いワタもあるし完璧ね」
アリサが戻ってきた当初に言っていたクリスマスネタを思い出したらしい。

「ご主人様はクリスマス料理をお願い。七面鳥の丸焼きに苺のケーキ、それにチューリップな手羽先唐揚げは必須よ」

どうやら、強引にクリスマスネタに戻したのは、パーティー料理が食べたかったからのようだ。こっちの世界は一〇月までしかないのです、永遠に一二月二五日はやってこないのだが、それほど良いようだ。

そもそも、公都は都市核の力で一年を通して温暖な気候に調製された常春の楽園だしね。

「そうだね。久々にパーティー料理を作ってみようか」

丁度、公都には日本から召喚された勇者ハヤトもいるし、彼も招いて日本を偲ぶ会でも開くのも良いかもしれない。

せっかくだし、お雑煮やぜんざいなんかの正月メニューも作ろう。

小豆やお餅もあるし、問題ないだろう。

「やったー！」

「わーい」

「なのです！」

「喜び」

アリサが飛び上がって喜ぶと、年少組の子達も一緒にバンザイのスタイルで喜びの声を上げた。

「ご馳走はまだまだ先だよ。先にオモチヤを作ってしまったおう」

「は〜い」

「あいあいさ〜？」

「はいなのです。ポチは頑張るのですよ」

こうして、仲間達の協力のお陰で、たくさんのオモチヤを養護院に寄付する事ができた。

サンタのコスプレをさせられるところだったけど、セーラと一緒に慰問だったので、コスプレは滞在している館の自室で披露するに留める事ができた。

なぜか、その話をしたら、オレの仮装を見られなかったセーラが残念がっていた。

クリスマス風のパーティー料理は美味だったが、やはり日本人としては寒い冬にやらないと気分がでない。

今度はどこかの冬の季節の領地にも行った時に、改めてクリスマスや正月風のご馳走を楽しもうとおもう。

皆でコタツに入って、蜜柑でも食べながらね！